

協定学協会

米国土木学会 (ASCE) “Summit on The Future of Civil Engineering” に参加して

フェロー会員 土木学会会長 濱田政則
正会員 国際委員会 アイダン・オメール

1. 会議の概要

2006年6月21日より3日間、米国ワシントンD.C.においてASCE主催による“Summit on The Future of Civil Engineering”が開催された。2025年を目標として土木事業と土木技術者の将来ビジョンを描き、ビジョンを実現するための道筋を示そうというのが会議の目的である。ASCEからの参加者50名に加えて日本、英国、カナダなど米国外からも約10名が出席した。日本からは筆者ら2人が参加した。約60名の参加者が6つのグループに分かれ、それぞれⅠ) グローバリゼーション、Ⅱ) テクノロジー、Ⅲ) リーダシップの3つの課題について討議をし、各グループの討議結果を全体会議で報告して総括するという方式で会議が進められた。最後にこれらの3つの課題に関する検討結果を踏まえて“Aspiration Vision in 2025”として、まとめの討議が行われた。

ASCEからの参加者のなかには、本会議の実質的なスポンサーになったベクテル社の名誉会長 ステファン・ベクテル氏やCH2M HILLの会長 ラルフ・ピーターソン氏など、建設業界の代表者および大学の研究者、州政府の公共事業担当者などが参加した。

以下、本サミットの主要議題とJSCEとしての発言内容を紹介する。



写真-1 筆者らが参加したラウンドテーブルの参加者、中央がステファン・ベクテル(ベクテル社)名誉会長

2. グローバリゼーション

土木技術者の国境を越えたグローバルな活動のあり方やそれを支援するための制度、政策およびグローバルな活動を展開するために必要な土木技術者の資質についての討議がなされた。

JSCEからは、アジア諸国で急増する自然災害や環境破壊の現状と今後の動向を説明するとともに、日本の土木技術者が自然災害軽減や環境保全に果たしてきた役割および今後果たすべき役割を報告した。また、JSCEと日本建築学会の会員有志が設立した国境なき技師団(Engineering without Borders)のアジアでの活動を紹介した。

3. テクノロジー

防災問題や環境問題を含めて土木分野で今後開発を必要とする技術と、技術開発のための体制と研究費、および開発途上地域への技術移転の方策が討議の対象となった。

JSCEからは、Ⅰ) 自然災害軽減化技術、Ⅱ) 自然および都市の環境の保全と回復に関する技術、Ⅲ) 新エネルギー開発のための技術、Ⅳ) 既存社会基盤施設の診断、管理、修復など長寿命化に関わる技術、およびⅤ) 地下空間の利用による都市再開発技術、に研究開発の重点を置いていることを説明し、このうち自然災害軽減化技術に関しては耐震補強、津波警報システム、リアルタイム地震警報システムの今後の開発目標とアジア諸国への移転などについて報告した。

4. リーダシップ

健全で豊かな世界の社会基盤整備、自然災害の軽減および自然と都市環境の回復・保全に関して、基本計画の策定、事業の執行および地域住民の合意形成等において、土木技術者がいかにリーダーシップを発揮すべきか、またリーダーシップを発揮するために土木技術者に必要な資質と能力が討議された。

JSCE からは、古市初代会長の言葉「工学分野全体の技術者を統括するのは土木技術者である」を引用し、そのために土木技術者は、幅広い分野の見識・知識、コミュニケーション能力、企画能力およびマネジメント能力が必要であることを述べ、JSCE が行っている継続教育、資格制度、JABEE などを紹介した。

5. 会長特別委員会「土木の未来・土木技術者の役割」

本サミットに関する ASCE の報告は 8 月に公表される予定である。JSCE としても、この会合を契機として、わが国の土木界や土木学会の進むべき道・土木技術者の役割についてさらに議論を深めるため、平成 18 年度の会長特別委員会「土木の未来・土木技術者の役割」を設置し、すでに活動を始めている。本年末を目途に取りまとめ、報告

する予定である。

土木学会は 2014 年に創立 100 周年を迎え 2 世紀目に入ることになる。公共事業の長期的減少や官製談合などに端を発した土木事業に対する批判など、土木界を取り囲む状況は依然として厳しい。しかしながら、自然や都市の環境回復と保全、自然災害の軽減、新エネルギー開発など、土木技術者が活躍する分野は拡がりつつある。本サミットを契機に JSCE としても土木の未来や土木技術者の役割に関して多くの会員に議論を広めたい。このため、学会のホームページを通じてアンケート調査を実施し、広く会員よりこの課題に関し意見を募ることにしたので、会員の皆様の積極的な参加をお願いする (<http://www.jsce.or.jp/committee/chair2006/>)。

土木学会の本



鋼構造シリーズ 13 浮体橋の設計指針

浮体橋は、大水深や軟弱地盤に対応可能で、免震性に優れ、また走行面と水面とのレベル差が小さいため親水性や景観に優れる等、数多くの長所を有しています。一方、波による動揺や水位変動による路面高の変化への対応、漂流防止等の、一般の固定橋にはない設計上の配慮も要します。

「浮体橋の設計指針」では、浮体橋の設計における要求性能と照査方法、浮体橋特有の設計項目と解析法、係留構造・付帯設備の設計、維持管理等、浮体橋の設計及び維持管理において留意すべき事項を網羅しており、浮体橋に関わるすべての方に有益な内容となっています。

- 編集：鋼構造委員会 浮体橋の研究小委員会
(委員長：大阪地域計画研究所・渡邊 英一)
- 平成 18 年 3 月発行、A4 判、235 ページ、並製本
- 定価：3,570 円 (本体 3,400 円+税 5%)
- 会員特価：3,220 円 ■送料：470 円 ISBN 4-8106-0537-X

●お申込み・お問合せ先

発行所：(社)土木学会・出版事業課
TEL 03-3355-3445 / FAX 042-946-0969
<http://www.jsce.or.jp/publication/>

発売所：丸善(株)出版事業部
TEL 03-3272-0521 / FAX 03-3272-0693